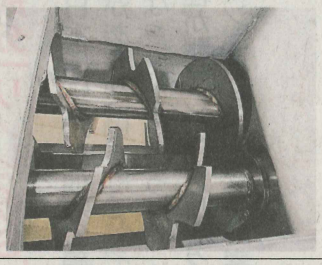
（第３種郵便物認可）　神戸新聞

神戸の蓬莱精工

野菜加工ごみを破砕・脱水
新型の処理機開発
廃棄コスト最大75％減

産業機械製造などを手掛ける蓬莱精工（神戸市西区）が、野菜加工で出る生ごみの破砕・脱水を行う新型の処理機を開発した。二つの工程を「1台2役」でこなす独自技術を進化させ、処理速度や耐久性を向上。産業廃棄物扱いとなる加工工場などの野菜ごみで、最大75％の廃棄コスト削減につながるという。（横田良平）



（上）カット野菜工場で稼働中の破砕・脱水機。中央から野菜ごみを投入し、腕の部分で破砕と脱水を繰り返し、排出する（下）らせん状に2本並んだスクリュー。野菜ごみを細かく砕きつつ、圧力で水分を絞り出す（いずれも蓬莱精工提供）

新型機は、らせん状に刃がついた2本のスクリューが回転。投入した野菜ごみを砕きながら前方へ押し出し、スクリューの圧力で3段階に分けて水分を絞り出す。同社のテストでは、ナスや白菜などの計100㌔が、処理後は計30㌔未満になった。

例えば、野菜ごみの処理費用が1㌔当たり20円の場合、1日に3㌧を排出すると、1カ月の処理費用は180万円かかる。野菜ごみは水分量が多いため、7割減量すると120万円以上の削減効果が見込まれる。

同社は、1959年創業。資本金1千万円、従業員10人。野菜の破砕機などを手掛ける。今回の新型処理機は、国の補助を受け、機械の素材や脱水の構造を改良。耐久性も従来品より向上している。

総菜大手ロック・フィールド（神戸市東灘区）は、静岡ファクトリー（静岡県）の設備更新に伴い今春に新型機を導入。1日4㌧の野菜ごみが出るといい、担当者は「容量が減り、処理費用が削減できている。さらなる脱水機の導入も考えたい」と話す。

蓬莱精工の蓬莱正元社長は「飼料や堆肥などの再資源化促進にも役立てたい」と話している。